

朗読絵本

ギロチンと魔獣



日もすっかり落ちて、虫の声と、月の光だけが照らす、
人気のない森の中
裸の少年が一人、縛り付けられています。

奇妙なのは、その少年の開かれた足の間に、

小型のギロチンが仕掛けられていることでした。

小さいながら重そうなその刃は、少年の口に咥えられた紐によって支えられています。

もし少年が、少しでも顎の力を抜けば、その青白い斜めの刃は、少年の大切な所を、
簡単に切り落としてしまうでしょう。

一体何故、この少年は、このような屈辱をうけているのでしょうか。





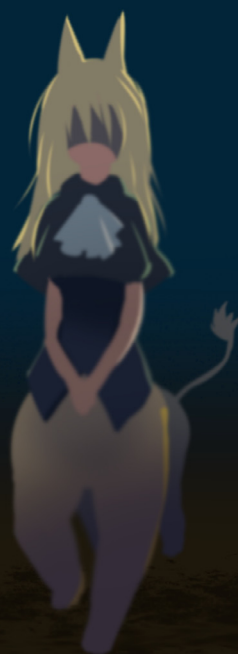
少年は駆け出しの薬売りでした。
旅をして、土地の珍しい薬を手に入れては、次の土地で売る。
彼ら薬売りはそうして暮らしていました。

ただ、身寄りも無く、仕事を始めたばかりの少年は、
知らなかったのです。少年の並べた中に、土地によっては、
売るだけで重罪になる薬があることを。

異国の道端で店を広げていた少年は、突然憲兵に捕まり、
そして裁かれ、執行されたのがこの刑だったのです。

刑罰は日没から縛り付けられ、夜明けまで耐えられれば
釈放でした。少しでも気を抜けば、自分の体の一部が
切り離されてしまう恐怖に、少年は必死でした。

もう何時間耐えたことでしょう。夜も大分更けました。
顎は震え、不安定な体勢で足も疲れ、だんだん力も無くなってきました。
それでも、少年は必死に耐えようと気を張ります。



だけど、このままの気力があれば、油断さえしなければ、夜明けまではなんとか
耐えられるかもしれない。

少年の心に、いくらかの余裕が出てきたその時でした。

今まで何の気配もしなかった森の中から、見たこともない影が現れたのです。
音も立てずに、猫のような足取りでゆつくりと歩いてくるその姿は、
明らかに人間のものではありませんでした。

無造作に伸ばされた髪は、野性的な趣きながら、さらりと綺麗になびき、金色と赤の混じった細長い瞳孔は、夜でも妖しい輝きを湛え、上等な生地を使ったであろう服を来た、その女の子の下半身には、人間の首など簡単にもぎ取ってしまいそうな獣の四肢が伸びていました。

少年の前に現れたのは、魔獣という生き物でした。

「こんばんわ、人間さん」

初めて見る魔獣に驚いて、どうしたらいいかわからない少年に届いたのは、優しい女性の声でした。

「君みたいな可愛い男の子は初めて見るよ。こんなところに繋がれて、一体何をやってたっていうの？」

聞かれても、今の少年は挨拶を返すことも、返事をすることもできません。

ただ、話を通じる相手だったということと、その少し気さくな態度に、少年は少し安堵しました。

（なんとか、助けてくれないかな）



優しそうな魔獣の笑顔は、とても可愛らしく、少年の心に安堵の次に来たのは、羞恥でした。
自分の一番恥ずかしい所を、女の子の前に晒してる。
魔獣は、そんな少年のもしもじとした心に気づいてか、今度は少年のその晒された部分に顔を寄せてきたのです。

「ふふ、君、可愛いの持っているね。プニプニしてそう」

そう言うと、魔獣は少年の肌色のペニスを手にとると、
その感触を楽しむように撫で回したり、つまんだりしてくるのです。

紐を啜える少年に思わぬ動揺が走りました。

恥ずかしがる少年を、魔獣は楽しむかのように、
更にその先の皮を指先でつまみ、剥くと、
清めてない亀頭に鼻を寄せ、匂いを嗅いできたのです。

これには少年は恥ずかしくて、
顔を赤らめながら、やめてー！という
声にならない抵抗の声を上げました。

「くんくん。美味しそうな匂いをするよ？
これは童貞さんのおちんちんだね。」



魔獣の舌は、優しく丁寧に、微かな音を立てて、少年のピンク色の亀頭を舐ります。
そうかと思えば、緩急を付けて突然吸いたて、強い快感を与えてくるのです。
その度に少年はビクンと震え、危うく口に加えた紐を離しそうになってしまいました。



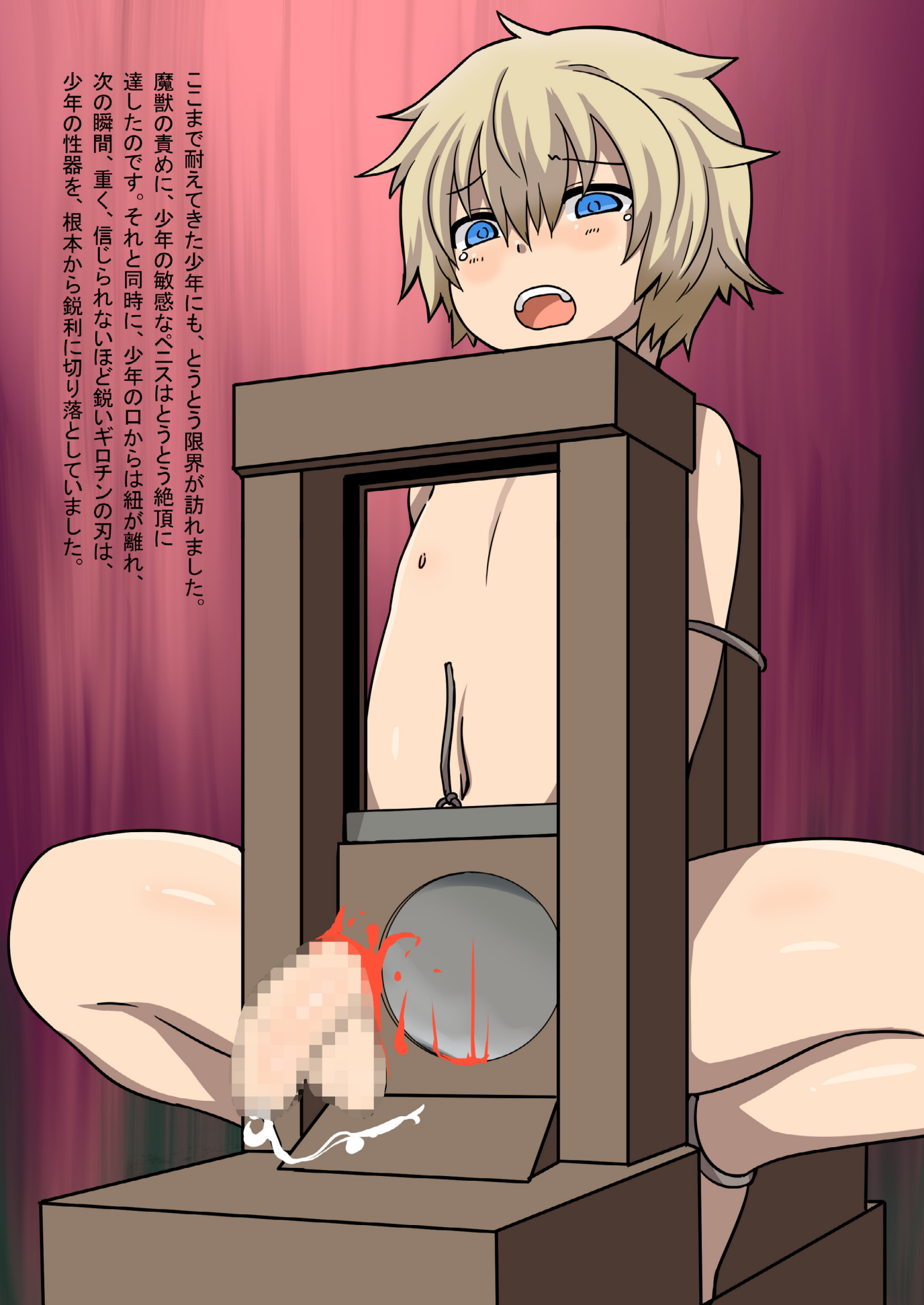
そう言いながら、次はあーんと口を開けると、
今度は少年のペニスを、味見するように舐めしゃぶってきたのです。
少年は、匂いを嗅がれた上に、
味まで確かめられたことに羞恥心を隠せませんでした。
それに加え、初めて味わう快感が襲いかかってきたのです。

もうここまで来ると、魔獣の目的は明らかでした。しかし、無理やり回の紐を引っ張れば、すぐに済む話なのでしょうが、この魔物はそれをしないのです。抵抗できない獲物を、じっくりと甚振るのを楽しんでいるのです。

少年がだんだん快楽に上り詰めてきた頃を見計らって、魔獣は回を離し、仕上げというように、今度は指先でしごき始めました。目を白黒させる少年の耳元でささやきます。

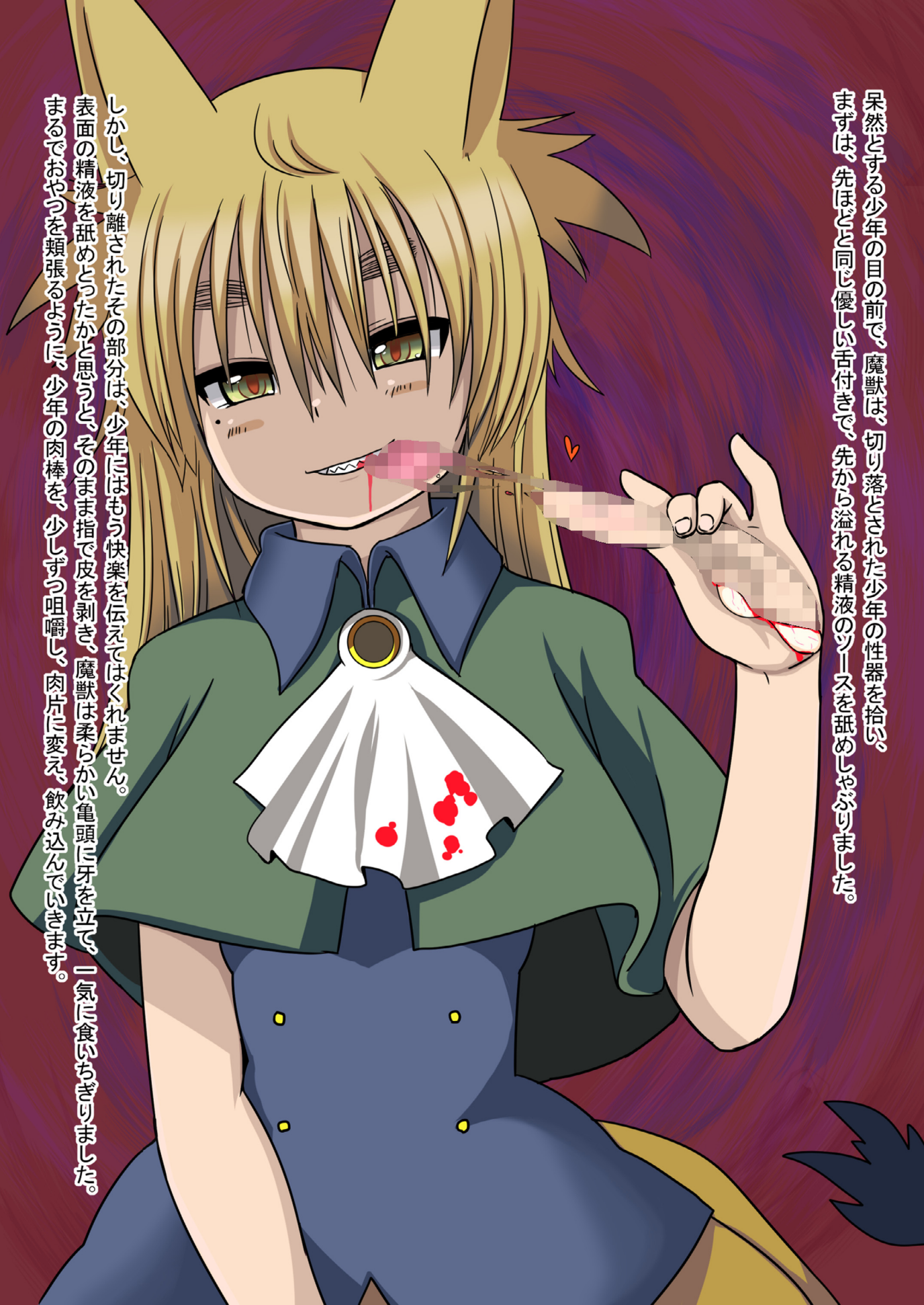
「ねえ、まだ離してくれないの？私、貴方のおちんちん早く食べたいなあ♡君のプリアリでピンク色のソーセージ、いっぱい噛んで、ゆっくり味わって、美味しくたべてあげるから、ね？」

ここまで耐えてきた少年にも、とうとう限界が訪れました。
魔獣の責めに、少年の敏感なペニスはどうとう絶頂に
達したのです。それと同時に、少年の口からは紐が離れ、
次の瞬間、重く、信じられないほど鋭いギロチンの刃は、
少年の性器を、根本から鋭利に切り落としていました。



呆然とする少年の目の前で、魔獣は、切り落とされた少年の性器を拾い、
まずは、先ほどと同じ優しい舌付きで、先から溢れる精液のソースを舐めしやぶりました。

しかし、切り離されたその部分は、少年にはもう快樂を伝えてはくれません。
表面の精液を舐めとったかと思うと、そのまま指で皮を剥き、魔獣は柔らかい亀頭に牙を立て、「一気に食いちぎりました。
まるでおやつを頬張るように、少年の肉棒を、少しずつ咀嚼し、肉片に変え、飲み込んでいきます。



「うんうん。君のおちんちん美味しかったよ？
とっても柔らかかったし、新鮮な菌ごたとえと味がした。」

魔獣は竿の部分を食べ終わると、今度は最後に残った
精巢を二つずつ、ぐちゃぐちゃと噛み潰して味わいました。
「これでもう君の男の子としての部分、無くなっちゃうね。」
目の前で自分の大切な部分が食べられていくことに、
少年は抗議しようとしたが、疲れた顎が動かず、
言葉にはなりませんでした。

魔獣は、少年の性器を食べ尽くすと、それだけで満足したのか、背を向けました。

「これ以上食べちゃうと、他のみんなに独り占めするなって怒られちゃうからね。周りのみんなも、君のこととっても食べたくなってしまうみたいだよ？」

今まで静かだと思っていた森のなかから、幾つもの二つの光が浮かび上がります。それは全て、少年のことを物欲しそうに見つめる目でした。



魔獣の女の子が背を向け森の奥に立ち去ると、
闇から出てきたのは数々の下等の魔獣でした。
今日はご馳走のようです。
みんななどの魔獣も、少年の柔らかい肉を
食べたくて待ちきれないようでした。
あつという間に、魔獣たちは少年を引きずり下ろすと、
それぞれの肉の取り分を、
仲良く美味しそうに食べ始めました。



翌朝、役人が刑場を見に来ると、
そこには地面に残る血のあとと、いくらかの骨が
少し残されているだけでした。
それらを片付けた役人たちは、何時も通り、
「罪人は逃走後、行方不明」
とだけ報告書に書いて、帰っていきました。

終

